

たかさし 史話 42

「近世都市高砂の繁栄(1) 江戸中期の人口」

十六世紀末に高砂が在家一〇〇軒と称される港町であったことが朝鮮出兵の水主役一〇〇人から確認できることは前に書きました。その後、池田輝政による高砂築城と港湾の建設、本多忠政による高砂廃城と高砂神社の旧地移転を含む新たに町割りによって本格的な近世港湾都市が成立しましたが、江戸時代の経済成長にともなって高砂は都市として一層発展を遂げました。その具体像として今回は江戸時代の高砂の人口を見ておきましょう。

元和の町割り以後、急速に町家建設が進んだらしく、寛永期(一六二四〜四四)には「大小軒をつらねて四千軒」になったと伝えられています。この時期は幕府が諸大名を動員して大規模な大坂城再建を行っていきますので、そのような建設ブームによる好景気の影響があったのかも知れませんが、史料的には確認できません。

高砂はその後、人口が減少しています。安永二年(一七七三)の「高砂町方明細帳写」

(船津重次氏所蔵文書)ですが、それによりますと棟数一三三二、籠数一九三六、人口八〇九七人であった事が分かれます。また、明和二年(一七六五)の「三町人別高之事」(酒井家史料)によると城下町姫路は一万七〇六四人、飾万津六一九〇人、高砂八三七七人となっています。

この八千人程の人口は現在の都市人口からみると少ないように思われるかも知れませんが、一村の人口が百人から数百人程度であった江戸時代では繁華な都市であったと言って良いでしょう。ちなみにほぼ同時代の兵庫津は人口約二万人で規模が大きく、室津は約三千人で規模は小さかった様です。また明石は城下町ということもあってか約九千人、摂津の西宮、和泉の貝塚、泉佐野といった大阪湾沿いの港町は七、八千人程度でした。高砂はそれらと並ぶ畿内先進地帯の中規模港湾都市として流通経済の発展に重要な役割を果たしていたのです。

(市史編さん専門委員長

今井修平)